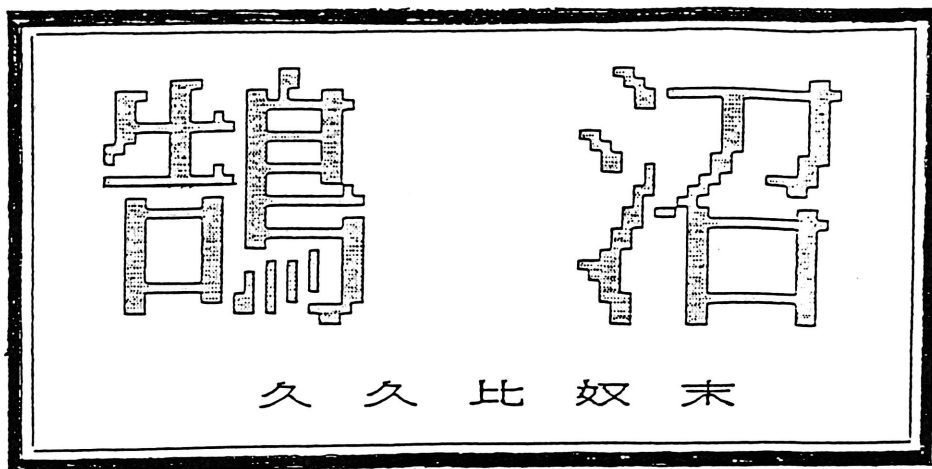




はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 4 6 号

1 9 8 9 年 1 月 1 0 日

私のふるさと鵠沼

関根 次郎

書 簡

田中まさ子

鵠沼を語る会

私のふるさと、鵠沼

市民活動課 課長補佐
関根 次郎

鵠沼の思い出

生まれ、育って40何年の鵠沼、農家で家の手伝いをしながら育ったので、なつかしい思い出話をさせていただこうと思います。

〔地引網〕

今でも、プールガーデンの西隣りで地引網をやっていますが、おもに観光向けになっています。以前は半農半漁で、とれる魚は主として”しこ”や”いわし”が中心でした。昔は今よりも、もつともつと沢山とれた。網元が2軒あり、大漁だと、天秤でかついで、海岸から堀川みちをかけ声をかけながら帰ってきたものです。

〔小田急線・単線のころ〕

駅に電車を見にいつて、電車に乗っている進駐軍の米兵に向かって、「サンキュー、サンキュー」と声をかけると、電車の中からチューインガムを投げてくれました。1枚のガムを友達と二つ三つに分けて食べたものですが、あの銀紙と、なんとおいしいものだろうと思った味が忘れられない。もう一つ思い出すのは、電車に裸足で乗ったこと、駅員さんに注意されたのを覚えています。

〔進駐軍のジープ〕

近くの大きな農家に進駐軍が間借りをしており、常時ジープが置いてありました。時には乗せてもらって近所を走った。当時、車は珍しく、とても嬉しかった。今では信じられないけれど、車の排気ガスの匂いがとてもいい匂いに感じられて、車の走ったあとをわざわざ匂いを嗅いでいた覚えがあります。

〔松露〕

昼先の雨後、松の木の下で採れました。特にお天気雨の後が良く、湘洋中学あたりから浜見山にかけて、熊手を持って取りに行った。ちょうど里芋のような大きさ、その味はとくにわすれてしまった。当時、松露入りの羊羹が鵠沼の名物となっていた。現在でも銘柄だけは残っています。

〔くずかき〕

晩秋から冬にかけて、黒松の落ち葉を燃料にするために拾いにいった。かまどでごはんを炊くのに恰好の燃料になったのです。松が岡、桜が岡の別荘地に、背負い籠をかついで取りにいった。小学校の上級生あたりが大将になり3・4人でよくいきました。

〔農作業の手伝い〕

家では、子どもの手をあてにされており、日課となつて当たり前のこととして、農閑期以外はよく働いたものです。学校から帰宅すると、まずお茶を水筒にいれて、畑まで運んだ。おやつは、さつまいものふかしたのや、芋団子だつた。田んぼは、” いわし場” ” 地蔵袋” ” 鉄砲場” とあざ名で呼んでいた。ふつうは楽しい夏休みも、家の手伝いで、いやでいやでしょうがなかつた。朝から日がくれるまでよく働いたものです。合い間をぬつて泳いだりしましたが。農作業の中で一番大変だつたのは、草取りだつた。夏場は草取りに追まわられていた。耕運機がなかつたので、手が万能で、薯をほるのも、稲を刈るのもみんな手でやっていた。汚い話だけれど、下肥（人糞）が主だつたので、非農家にリヤカーに木桶を積んで、もらいに行つた。男の人は天秤の前後にかけて運んでいた。当時はありふれた風景なので、匂つてもどおいうこともなかつた。今でいう有機農法で、出来た旬の野菜の味は格別だつた。農家のおかみさん連中は「商い」といって、採れた野菜をリヤカーに積んで別荘地の松が岡や、桜が岡に売りに行つた。1日、リヤカー一杯分の野菜を売って、5千円から6千円位の売上で、唯一の現金収入だった。夕方、帰ってくる母を自転車で迎えにゆき、母の引いたリヤカーを自転車につけて帰つたものです。今から考えると親孝行になつたのかなと思つています。

〔しらみ〕

小学生の頃、しらみがまだいました。学校でしらみの検査があり、DDTで頭を真っ白にして泣いていた女の子を思い出します。家庭でも粉末の薬を常備しており、また、目の細かい櫛ですいて取つていた。のみもいました。朝起きると、布団を陽の当たる縁側に出して、のみ退治をした。蚊にはよもぎを採ってきて、かやりぶしをしていました。

〔遊び；コマ、メンコ、ビー玉など〕

昔は工夫してよん遊んだものです。騎馬戦やら、宝とりなど。今と違って、先輩、後輩のつながりがあり、ガキ大将がいてうまくリードしてくれた。縦のつながりの結束が強かつた。夏には大木の上に丸太を組んで涼み台を作つて遊んだ。木のない家は日陰に縁台を作つて遊んだ。

〔紙しばい〕

冬の間、紙しばいをやつていた。夏場には、アイスクャンデーを鐘をならして売りにきた。冬場の紙しばいは楽しみで、「少年タイガー」などをやつていた。組の常会場で午後3時ごろからやつていた。水あめや塩こんぶ、イカの足などを売つていたが、甘い物がなかつた時代で水あめがごちそうだった。練ると、白くにごるのだが、競争で練つて早く白くなつた子には、塩こんぶか何かおまけをつけてくれた。

〔防空ごう〕

私は戦争を知っている年代の最年少になると思います。子どものころ防空ごうがどの

家にもありました。防空ごうの中で、にぎり飯を食べたのや、夜中でも警報がなると急いで入った。あざやかに思い出すのは、防空ごうの上に咲いていた水仙の花です。防空ごうのおおいの上一面に植えてあったのです。今でも水仙の花を見ると防空ごうを思い出します。

あの日、あの時

暮れ、煤払い 12月の中旬前後にやっていた。家具、神棚、仏壇、たたみ、など全部外して大掃除をした。どこの家でも行うので、たたみを叩く音があちこちから聞こえ、暮れの風物詩になっていた。その日のお昼には必ず味噌味のおじやを食べた。

餅つき 組でやっていた。こねることから始まり、本づきで終わる。真夜中から朝にかけて徹夜でやっていた。あわの餅もついたが、それは年内に食べた。農家の土間で大釜でセイロでふかし、そこでついた。当時は味噌とか醤油なども土間で作っていた。

一月 七草

6日の夜、神棚の前で、包丁の背でナズナを叩いた。お供え餅を入れて七草がゆを食べた。三が日は女の人は台所はやらない風習で、男の人がやっていた。神棚にあかりをつけて、おさき（木でできたお皿）に入れて、朝昼晩お供えもしていた。

ダンゴ焼き、どんど焼き

14日、正月のお飾りを集めて道祖神の前で焼いた。おだんごを桃の木に刺して焼き、食べると風邪をひかない。書き初めを燃して高く上がると上達すると言われた。

小正月（15日）

あづきとお供え餅を砕いて入れた粥を炊く。

二月 あづき飯

毎月1日・15日、朝炊く。

節分

ヨウカゾウ（1っ目小僧）

怖い思い出として残っている。1っ目小僧が来るというので、目の沢山ある籠を外に出していた。

初午

稲荷講、餅つきの講とは違う。のぼりばたを立ててやつた。

三月 地神講

地神様の軸を掛け線香を供える。

四月 タウナイ（シロカキ）

鵠沼車庫、八部公園あたりまでは一面の田んぼだった。はす池のまわりも田んぼで、睡蓮の花のピンクと水田の緑でとても美しく、のどかな田園風景だった。この時期になると、あちこちの田んぼで、万能というくわでシロカキをやっていた。

五月 お節句

凧あげが盛んだった。空が黒くなる程たくさんの凧が揚り、うなりの音が響いた。

茶つみ

農家ではお茶も作った。炭火で蒸したお茶を手でよつていた。香りがとても良かった。

麦刈り

大麦、小麦を作っていたが、大麦の穂がチクチクするのが嫌だった。脱穀機がないのでセンバでしごき、最後に業者が発動機を使つて脱穀した。

六月 田植え

家族総出でやった。田んぼに入っていると、ヒルに足を吸いつかれることがあり、それがとても嫌だった。

七月 草取り

アメリカえびがまだまだ田んぼにいたので、草取りがだいぶ助かった。

八月 7日（ナノカビ）

墓地の掃除、お盆の準備、神明さまの掃除も部落から出てやっていた。

13日

迎え盆。むかえ火をたき、ナスときゅうりで牛と馬を作り戸口に置いた。

14日

おはぎ（ぼたもち）

15日

送り火。

17日

神明様の祭礼。昔は町内に山車小屋があつたので、16日の宵の宮（よみや）には、町内を山車を引いて歩いた。17日は堀川部落から神明様まで引いてゆき、また町内に帰ってきた。今は烏森の倉庫に収納されているので、そ

ういうことはなくなり、さみしくなった。よみやの16日には各町内に日待宿（おひまち）を毎年おき、農家の庭に太鼓の櫓を組み、山車もおき、人形も座敷に飾り、夜おそくまで賑やかにやつた。祭りは「一時（いつとき）祭り」とも、口の悪い人には「きちがい祭り」ともいわれた。真夏の1時から3時の暑い最中に行われた。山車を引くとシロツプの水とアンパンをいただいた。アンパンは各家から小麦粉を集めて作られたもので、たいへんおいしかった。

9月 庚申講

おそばを食べる習慣。

十五夜

この夜だけは、お供え物を黙つてとつても良いとされていた。月あかりをたよりにあちこちを回り、柿の木からは柿を、畑からはしょうがを取つたりした。

遊行寺の開山忌

サーカスの小屋が出て賑わつた。

十月 芋掘り

オキナワという名称の芋が採れた。鵜沼にでんぶん工場が2ヶ所あつたので掘つた芋を運んだ。

稲刈り

掛け干しで忙しかつた。

十一月 えびす講（20日）

一升マスにお金を入れた。

芋だんご

大好物だつた。切干し状にして、むしろに干して乾燥させる。それを精米所で粉状にしてもらい芋だんごにする。

十二月 麦ふみ

ヨウカゾウ（8日）

一っ目小僧

火の番

二・三人が組になり、町内の火の見回りをやつていた。夜中に目がさめると、拍子木をカチカチと叩く音が近くなり遠くなつていくのが怖かつた。木札が当番の家にあつたのを覚えている。

おわり

書 簡

田 中 ま さ 子

私ごとで誠にすみませんが、昭和63年10月8日は私にとって忘れられない日になりました。それは、塩沢さん初め会員の皆様の暖かいお心くばりによつて、懇親会をかねて私の快気祝いをして下さいました。何んとも有難いことでした。

私は8月に体調をくずし、また永年の腰痛が治るものならと、信州の鹿教湯（かけゆ）温泉へ二ヶ月余り入院を致しました。

この病院は、なだらかな緑りの山にかこまれた大きな立派な病院で、各科があり、466床と研究付属病院99床という広いもので、まず広い廊下にあるおびただしい車椅子の数に驚きました。私のリハビリはきついものではありません。骨が老化しているので、折れないように気をつけました。長い入院の間に信州弁を使つて、ナースや他の入院患者と自然親しくなりました。

車椅子に老夫を乗せ、それを押す妻は腰がくの字に曲つている老人です。また、若い人で明日の社会復帰を願つて懸命にリハビリを続ける姿を眼の前に見て、心を打たれました。みな真剣です。こんなの会話も耳に入りました。「ぢいちゃん、早く治つて家に帰つて、田んぼも見なきゃあならねえぞ。畑も草ぼうぼうだしな。」「だが、こんなに長く入院して居られるなんて、有りがてえことだ。昔なら畑も山も売つてしまつたづらにな。」といつて、また「若いもんのおかげで、年金てえもの貰つて、長い病院生活ができて有りがてえなあ。」という。この小さな町は、小さな田んぼがあり、若いものはみな遠くへ働きに出て、家にいる老人夫婦が畑をし、田を作つている「今年は陽気が悪いで早く種をまかなきゃなんねえで、早く歩けるようになれやな」と、でもこの農村の老人にはまだ土地というものがある。

ここで、私は鶴沼の老人を考え、感慨を深くしました。「老人の幸せ」ということが都会と田舎ではちがうように思いました。ここの部落では、まだ「生活共同体」という言葉が生きているのです。

昔は社会保障というものがなかつたので、村のどこかで病人が出たり、また災厄が起つたりした場合は、そのケースに応じて助け合つていかなければならなかつた。そ

れは、その村がほぼ同じような生業に、生産にたずさわっていたから、まとまりやすく、共同しなければなり立つてゆかなかつたからです。

昔の鵠沼にもありました。労働力を借りればまた労働力でかえす、というごくあたり前のことが、今でも残っている部落があると聞きます。調べて見たいと思います。

この生活共同体ということは、社会生活の上でも、子供の教育の面でも、美しいことではないでしょうか。

おわり

「鵠沼」平成元年 1 月 10 日 46 号

平成元年 3 月 1 0 日 発 行

私のふるさと鵠沼 関根 次郎

書 簡 田中まさ子

発 行 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸 2-10-34

編集鵠沼を語る会代表塩沢 務

藤沢市鵠沼海岸 3-12-33

電話 36-7876